The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ブラジル日系社会からの思想史 ―半田知雄論―
Author(s)	Soares Motta, Felipe Augusto
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69683
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（SOARES MOTTA FELIPE AUGUSTO　）	
論文題名	ブラジル日系社会からの思想史 ―半田知雄論―

論文内容の要旨

本研究では、一人のブラジル日本移民の知的営為を中心的に取り上げる。その人物は子どもとしてブラジルに移住し、一生にわたり自分の歴史、また自分が所属するマイノリティー集団について思考を巡らした。彼にとって自分が移民であるということは付随的な境遇ではなく、自己の生涯を根本的に規定した事柄である。生まれて数年で移民になり、移民として「異国」を経験した。移住先を永住の地と定め、「帰国」が果たせぬ、いつも旅路にいる「異邦人」としてマイノリティー集団の内に、その集団の歴史と歩を合わせて生涯を送った。その人物の名前は半田知雄で、彼が所属していたマイノリティー集団は二十世紀のブラジル日系社会である。半田は職業を画家としていたが、評論家・移民史家としても活躍した。

本研究の第一章では、戦前から始まり、戦後に本格的に組織化されるブラジル日系社会の知識人グループとその言論空間を分析した。第一節では、知的営為に積極的に携わる日系知識人の存在を取り上げ、近年の研究、主に佐々木剛二の業績の位置付けと批判を行った。戦前ブラジル日系社会からは、文学雑誌『文化』を取り上げ、その位置づけを行った。『文化』はアンドウ・ゼンパチを中心とする媒体で、一九三〇年代末に高揚していた日本国粋主義的な言論に対抗するため刊行された。『文化』の主な特徴は祖国日本との関係性を重んじている点である。『文化』に掲載される同人の文章、または開催される座談会の記録をみれば、ブラジルにおける日本文化の存続、同化過程に対する議論、さらに子弟教育をめぐる討論が確認できる。これらのテーマは、戦後日系社会の言論空間に継承される。また、『文化』はポルトガル語枠をも設けており、それを通じてブラジル人または日本語を解せない二世に対して日本文化の紹介を行っていた。

敗戦と勝負抗争の経験を通じた戦後のブラジル日系社会には、日系知識人の組織化が確認できる。土曜会の機関誌として刊行される『時代』は、『文化』と共通のメンバーとテーマを維持して、戦後の日系社会の在り方を積極的に議論した。この媒体では、戦前の思想に対する反省や、当時の日系社会の在り方、文化伝承と子弟教育の問題などが論じられた。テーマの関連上、『文化』からの一種の継続を意味するが、祖国との意識的な乖離は『時代』の最大の特徴であろう。また、『時代』が廃刊されてから、『ブラジル研究』と『研究レポート』を通じて、現在のサンパウロ人文科学研究所（人文研）に続く系譜を示すことが出来た。『時代』の発行から、日系知識人によって展開される知的営為はますます「科学的」と「客観的」な知的実践として据えられようになる。

第二節では、半田知雄によるブラジル日本移民の総合史の試行、『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道』（一九七〇年）の成立過程をみた。同書は、人文研という空間を中心に、「ブラジル研究ゼミナール」という議論の場を通じて考察され叙述されたことが確認できた。「生活」を主軸にして移民史の叙述に挑む半田知雄の姿勢を同書の最大の特徴として論じた。

第二章では、半田知雄が生涯にわたって繰り返して立ち戻った少年時代の記憶をめぐる記述を論じた。コーヒー農園＝ファゼンダで子ども移民（同伴移民）として過ごしたその時期は、半田の生涯を深く刻印し、後の『移民の生活の歴史』と〈移民絵画〉にも表象される。その時期をめぐる三編の記述を取り上げ、その記憶が如何に再構築・再編成され、物語＝ナラティーヴとして再解釈されるかを論じた。その際、公と私の記憶と表象を交える歴史叙述の過程を考察するとともに、移民研究におけるエゴ・ドキュメント論（主に日記論）の可能性を追究した。半田にとっての少年期は、懐かしい記憶としてよりも、一つのトポスとしてみられるべきという結論に至った。

第三章では、画家としての半田知雄の活動に目を向けた。半田はサンパウロ美術研究会（聖美会）の創設に参加した日系人芸術家の第一世代に属し、長年その幹部をも務めた。移民史家、またはブラジル日系社会を対象にする評論家として記憶されることが多いものの、半田は生涯を通じて「絵かき」としての自己意識を保持した。かつて文学青年であった半田は、画道を歩む決意をし、六〇年間にわたって制作活動を営んだ。時には、執筆活動と絵画制作の均等は保ちにくく、半田はそれについて悩んだが、一九八〇年代後半になると公的な執筆が激減するのに対し、絵画制

作は晩年まで続けた。

半田の絵画制作に特に重要だったのは「タビ」であった。日系社会の集住地を頼りに半田はブラジルを旅し、絵を描いた。この現場主義ともいい得る態度は晩年、体力的な限界が訪れるまで続いた。

我々は半田知雄の執筆活動と絵画制作を繋ぐ軸は「生活」に対するこだわりであると論じた。主に絵画では、半田はブラジルの風景や自然を表象するとともに、初期日本移民が生活した空間を描いた。ブラジル、あるいは日本移民の生活を描いたそれらの作品を、我々は〈移民絵画〉と称している。その多くは、戦時中に写生旅行が不可能になった時に、半田が描きだしたものであり、戦後にブラジル日本移民資料館に寄贈された。それらの作品の大半は、一九八〇年代に『ブラジル移民の生活』という日本で刊行された画文集に収録された。

移民を描いた移民として半田知雄はたびたび「移民画家」という称号を付随されるが、半田の制作活動は移民の表象に限定されず、幅広く、自画像や風景画にもわたった。本論で紹介したミヤハラ・コレクションはおそらく半田知雄作品の最大の私蔵コレクションだが、その中に半田の作品の多様性が確認できる。

〈移民絵画〉を取り上げる際、作品論と受容論という二つの観点から考察を進めることが重要と我々は論じた。その制作自体は半田の創作意欲によるものであったが、移民資料館への寄贈、または画文集の刊行は、〈移民絵画〉をブラジル日本移民の最も有名な視覚表象として押し出すことになった。また、〈移民絵画〉に表象されている光景は、ファゼンダでの生活空間がもはや不可視化しつつあった時に考案されたので、公私にわたる記憶を具象化したものとしても考慮されるべきである。そこに表象されている風景は、風景画でも人間が空間に働きかける有様が描かれており、移民が能動的に活動する意味合いを含んでいる。また、登場人物の輪郭が太く明確に描かれていることもそのような解釈を可能にする。登場人物の表情が必ずしもはっきりしていないところは、キャンバスの中に日本移民とブラジル社会の融合を演出しているとも論じた。

第四章では、ブラジル日系社会史における最大の出来事である戦争と敗戦の経験を取り上げた。第一節では、『移民の生活の歴史』における「移民の悩み」という概念の意味を追求し、それを通じて、戦争を論じる際に半田が理解する「長い戦争」の意味合いを論じた。その長い戦争とは、戦前のヴァルガス政権によって施行される国家主義的政策に発端をもち、戦後の勝負抗争にまでつづくものであった。戦争と敗戦の経験が残した痕跡は、払拭されることなく、移民の生活を刻印した。戦後における「他者」として据えられる戦後移民との出会いは、戦前移民の悩みを深刻化させ、戦争が移民心理を根本的に規定する上で重要な出来事になった。

第二節において、「戦後」の日系社会史の誕生と勝負抗争の表象を取り上げた。主に負組（認識派）のグループを担い手に「戦後」の日系社会史が叙述されるときに、移民が経験した「長い戦争」に対する解釈が不可避的な課題として浮上することを示した。本研究では、主に細川周平と前山隆の先行研究に依拠して、如何に日系社会の戦後史が叙述されるかをみた。また、その歴史から零れ落ちる経験・感情・記憶を汲み取る方法として、移民文学の重要性に注目した。半田知雄は、一九六〇年代に既にその複雑性を「省略されたジグザグ」という表現を採用して究明している。戦後史では汲み取られていないこの問題について、本研究では『コロニア万葉集』に収録された短歌作品数点を取り上げて論じた。

第五章では、文化伝承・言語・移民心理という三つの分析項目をたてて半田知雄の思想を体系的に論じた。半田の唯一の論文集である『今なお旅路にあり』は、およそ三〇年間にわたる半田の思想の一つの集大成である。第一節では、文化伝承の問題が如何に戦前から戦後にかけて変遷したかを論じた。半田が起用する文化創造という概念は、永住を前提にし、新しいブラジル文化の形成における日本移民とその子孫の動態的な働きかけを訴えるものであった。その議論は、文化変容・同化論を強く意識した立場から、戦後にも継承されたといえる。

この問題と密接な関係をもつ言語の問題を第二節で論じた。民族的意識の代表としてあげられる国語に対する議論は、子弟教育の問題と結び付けて論じられることが多いが、ブラジルにおける日本語を言語学的な観点から考察している半田知雄の論考は先駆的であるといえる。移民が使用するコトバが如何に変化し、またはその変化は「劣化」であるのか、「変遷」であるのかを時系列的に分析した。

文化伝承の問題と言語から必然的に発生する問題として移民心理があげられる。戦前の国粋主義的な思想の崩壊と敗戦の経験、また子孫の成長は移住の意義をめぐる問題を深刻化させる。また、第四章でも論じたように、戦争の経験は移民心理を根本的に決定づける。半田の思想を貫く問題として移民心理を検証し、それを共有不能な経験としての位置づけを確認した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名（SOARES MOTTA FELIPE AUGUSTO）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	杉原　達
	副 査	大阪大学　教授	北原　恵
	副 査	大阪大学　准教授	安岡　健一

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　ブラジル日系社会からの思想史
―半田知雄論―

学位申請者　SOARES MOTTA FELIPE AUGUSTO

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　杉原　達
副査　大阪大学教授　北原　恵
副査　大阪大学准教授　安岡　健一

【論文内容の要旨】

本研究は、移民の子どもとしてブラジルに移住し、自身が属する日系社会について、長期にわたって思考し表現した画家・評論家・移民史家である半田知雄（1906～1996）の知的営為を跡づけるものである。本文だけで A4 判 140 頁を超え、参考文献 10 頁に加えて、付録として絵画等各種資料約 90 頁があり、きわめて大部の著作である。

序章では、半田の略伝を記したうえで、先行研究の検討、問題の所在、全体構成を示す。本論文のタイトルは、移民自身が早い段階から自らの存在と歴史に向き合い考えていたことを強調する点に由来する。つまり移民が移民を考え移民を記述する過程と言説をつぶさに検討することが本研究の目的である。

第 1 章では、ブラジル日系社会の知識人グループの存在と言説活動を、戦前の雑誌『文化』、戦後の『時代』と『研究レポート』を素材に分析する。日本との関係を重んじた『文化』と、意識的に距離をとった『時代』のそれぞれの特徴が示される。また日系知識人の組織化に注目し、現在のサンパウロ人文科学研究所（人文研）に至る知識人の言説空間の系譜を探求した。更に半田知雄『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道』(1970 年）の成立過程を検討し、同書が人文研の「ブラジル研究ゼミナール」という議論の場から生まれたことを実証した。

第 2 章では、半田が生涯にわたって繰り返し立ち戻った少年時代の記憶をめぐる記述を論じる。コーヒー農園＝「ファゼンダ」で子ども移民として過ごした時期は、後の主著『移民の生活の歴史』と〈移民絵画〉に表象される。少年期をめぐって書き直された戦前戦後にわたる 3 種類の記述の中で、記憶が如何に再構築され、物語＝ナラティヴとして再解釈されるかを論じた。

第 3 章では、画家としての半田知雄の活動に注目する。半田は戦前のサンパウロ美術研究会（聖美会）の創設に参加した日系人芸術家の第一世代に属し、「ピントール（絵かき）」としての自己認識のもとに 60 年間にも及ぶ制作活動を営んだ。半田の執筆活動と絵画制作を繋ぐ軸は「生活」に対するこだわりにみられる。半田は自画像や風景画も描いたが、〈移民絵画〉はブラジル日本移民史料館に寄贈され、また画文集『ブラジル移民の生活』に収録された。これらの絵画を作品分析および受容論として論述する。

第 4 章では、ブラジル日系社会史における最大の出来事である戦争と敗戦の経験を取り上げる。『移民の生活の歴史』における「移民の悩み」という概念の意味を追求し、半田のいう「長い戦争」の意味を論じた。それは、戦前のヴァルガス政権による国家主義的政策に発端をもち、戦後の勝負抗争の深い軋轢を経て、さらに「他者」とし

て立ち現れた戦後日本からの移民との出会いに至るまさに長期の過程であり、戦前移民の悩みを深刻化させるものであったことを詳述する。さらに日系社会の戦後正史の叙述過程とその内容を分析し、その正史から零れ落ちる経験・感情・記憶を汲み取る方法として、移民文学の重要性を『コロニア万葉集』に即して論じた。

第 5 章では、文化伝承・言語・移民心理という 3 つのキーワードをたてて半田知雄の思想を体系的に論じる。戦前の国粋主義的な思想の崩壊と敗戦の経験、また子孫の成長は移住の意義をめぐる問題を深刻化させる。また第 4 章にみたように長期にわたった戦争の経験は、移民心理を根本的に決定づけるものであった。半田の思想を貫く問題として移民心理を検証し、日本の人たちには理解してもらえない精神状態を彷徨するしかない生を生きるという思索を追跡している。

終章は、全体を総括するとともに、今後の課題を整理する。

【論文審査の結果の要旨】

以上の内容をもつ本論文の特徴は、考察の総合性にある。参考文献や付録資料の豊かさが示すように、半田自身の、また半田の活動した諸分野に関わる厖大な一次史料を日本およびブラジルで収集し、さらに先行研究についても広範囲にわたって目配りした上で分析が貫かれている。ここに総合的かつ学術的な半田知雄研究が結実したといえる。本論文は、一方で、半田が長期にわたって各種媒体に発表した著作や絵画に加えて、リライトを繰り返した日記などをしっかりと視野に収めるとともに、他方で半田が活動したさまざまな場に即して半田を相対的に位置づけることを試みている。そのことによって、半田知雄の個人史を尊重しその歴史的位置づけに迫るとともに、彼をその一人とする日系移民の社会史研究への確かな地平を切り拓いたといえる。

本論文に登場する人物は、近現代の日本とブラジルをまたがって実に多岐に渡り、また参考とされる文献の領域や数も極めて多い。本論文は、半田知雄研究、日本ブラジル関係史研究に大きな貢献をするだけでなく、さらに広く国際的比較を視野に収めながら、移民思想史や移民文化社会史への接続を開く可能性をもつ内容である。また移民研究におけるひとつの重要な方法として近年注目を集めているエゴ・ドキュメント論の領域に対しても、貴重な示唆を与える内容となっている。

とはいえ、いくつかの問題点も存在している。まず、自らを絵描きと称した半田の画業や作品の分析は、現時点での調査の到達点をふまえた上で、さらに詳細にわたって明確にすべき点が見られる。とくに戦時中に移動の自由が制限される中で工房に閉じこもって制作をした際に、どのような絵画を参照にしたのかについては調査が求められよう。また半田の著作や作品が、どのようなブラジルや日本における出版文化の中で公刊されたのかをみることは、国際的な知のあり方の連動を考える上で重要なポイントであり検討が待たれる。しかしこのような点は、いずれも今後の課題であり、一層の研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。